ふるさとの民話　（第二十四話）

『大木から下がった釣瓶』

昔、若林に、「よもさ」という家がありました。その家の道端に、大きな木がありました。誰いうともなく、夜中に、その大木から、釣瓶が下がると、うわさが広がりました。夜になると、誰一人として、そこを通る者がいなくなりました。

ところが、在所で、一番気の強い男が、勇気を奮い起こし、「よし、それなら、おらが、その釣瓶をとって、正体を見とどけてやろう。」といって、夜中に、ひとりぼっちで、その大木の下へ出かけました。

やがて、大木の下につくと、やはり、スルスルと、釣瓶が下がってきました。その男は、恐る恐る、釣瓶に手を伸ばし、本物の釣瓶か、化け物か、その釣瓶をなで回してみました。しかし、特別変わったものではなく、本物の釣瓶でした。

そこで、男は、化け物でないとわかると、勇気がわいてきて、ぶら下がっている釣瓶を、おもいっきり引っ張りました。すると、なんと、釣瓶の縄の先に、人がつかまり、大木から落ちてきたのです。その男も、これには、びっくり仰天しました。

在所の若者が、二、三人、大木に登って、釣瓶を下げて、臆病者の肝だめしをやっていたことが、みんなにばれてしまいました。

（若林町　　林　重右衛門氏の話）

→